
Round ZERO 【ゼロとWな転生者】 《試験投稿中》

HOT RIDER

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Round ZERO 【ゼロとWな転生者】 《試験投稿中》

【Zコード】

N9124Z

【作者名】

HOT RIDER

【あらすじ】

物語の守護者から突然言い渡された「転生」…タンクローリー爆発事故によって死んでしまった2人の仮面ライダー大好きなファンの男女、佐久弥立花と及川優梨子が転生したのは…ハルケギニア、所謂「ゼロの使い魔」の世界だった！？

2人の転生（ピギンズティッド）（前書き）

…これは無性にゼロ使が書きたくなつた作者の無謀な挑戦物語…。原作は呼んでいる…が、あまりに覚えることが多いので自分うまく書けるか不安です。

主に原作知識の方面でアドバイスをもらいたらありがとうございます。

2人の転生（ピギンズティッド）

英雄^{ヒーロー}…男の子であれば大半の者は憧れ、敬い、中には嫉妬するものもいるであろうか。

弱者を大いなる巨悪から身を呈して守り通し、時には孤独に打ちひしがれ、苦悩し、痛み、その先にバッドエンドが待つていようが信念を貫き通し戦う…その背中に誰もが心打たれ、時にはほろりとすることも。

仮面ライダー…このヒーローもまた心の中に生き、現代も子供達の心に勇気を与えている存在の1つ…いわゆる特撮ヒーローだ。

「異形」という仮面を被り、孤独に身をまかせながらも愛する「人達」のために戦うバイクにまたがった英雄…平成の世に入つてからは初代から続いていた「改造人間」という要素は姿を見なくなり、「仮面ライダークウガ」、「仮面ライダーアギト」は突然もたらされた「人外なる力」を持つてしまつた人間が、「仮面ライダー龍騎」や「仮面ライダー555」は「大きな力」を持つた人間達の正義を貫き通す話となつてている…時に「改造人間」という要素は消えるべきでなかつた」という意見も聞こえるが、この平成の傾向は「大きな力がもたらす結果」というものをさまざまと見せつけられており、ある意味昭和ライダーよりも「人の中にある正義」というものを強調されているのではないか?とも思える。

…そんな「仮面ライダー」というビッグタイトルが好きで止まない男女が2人…とあるオフ会の帰りにカラオケに寄り、その後とあるショッピングで「仮面ライダー オーズ」に出演する怪人の「ウヴァ（さん）」のフィギュアーツを買つた後に帰路についている男女…男の名は佐久弥立花、女の名は及川優梨子である。

この2人は2年前、どこかの「753オフ会」というオフ会で出会い、その後親交を深めた…現在はお互に「仮面ライダー」が好きな…今は親友である。

お互い名前に引っかかるといひと、「仮面ライダー 龍騎における各仮面ライダー デッキ所持者のキャラクターの相関性について」とも何とも小難しい議論で息が合い、その後はカラオケで仮面ライダーの主題歌を歌い尽くし、はたまた某レストランで「RXステーキ」を食べたり…と、オフ会仲間からもよく「恋仲」ではないことをからかわれるほど仲睦まじいのだが、彼らいわく「兄妹でいる気分」らしく、そういう恋仲にあることは想像できないという…まあ、その発言に特に冬とかには嫉妬の一言を浴びせられるのだが。

「スイッチはどれくらい集まりましたか？」

「俺は12個…でも40個つてなるとかなりきついよね。」

「そうですね。私はまだフリーーターの身なんですがまだ8個ぐらいしか。」

「今はしじみがないや、やるべきことを終わらせた後にゆっくり楽しめばいい！」

サムズアップ、仮面ライダーが好きなものとしては一種の挨拶ともなっている…と立花いわく…真実であるかは定かではない。

フリーーター…とはいっても、決して彼女がだらしないわけではなく、彼女は現在司法試験に向けて絶賛勉強中なので色々としじみがないといえる。

彼女の夢…それは「司法の面から正義を貫き通すこと」…過去に父親と一緒に見た仮面ライダー…その正義のために拳を振るう姿に幼少の気持ちはただただ感動し、いつかは生き方にも反映された。それはここにいる彼も同じ…彼の仕事は警察官、現在は巡査として街の交番の顔となっている。

こつして「仮面ライダースピリット」は受け継がれていく。創始者であるあの方も天からそんな「正義を愛する心」を見据えて笑顔でいるであろうと願いたい。

そしてその魂を持つ2人が…この直後、とある事態に直面し、そしてそこから人生を365度しつくり変えるような事態になるなど…この時誰が思っていたであろうか。

キキイ—————！

突然聞こえた甲高い…これはタイヤが道路に擦れる音だ、そしてその後に続く何かが倒れたような轟音。

そして2人が轟音に気を取られ振り向いたときには…どこかで見たようなガソリンスタンドのマークが描かれているタンクローリーが…道路で横転していた。

「車が爆発するぞお————逃げろお————！」

その方向から聞こえる叫び…おそらく車を運転していた運転手であろうか。

だが2人には衝撃的な光景が見えた…横転し、歩道までに出てしまつたタンクローリーの巨体に…足を挟まれ、助けを請いながら涙を流している女兒がいたからだ。

周りには誰もいない…おそらく「爆発」という単語に恐れおののいて逃げ去ったのである。

「臆病なぐらいがちょうどいい。それのほうが長生きする」と某探偵は言っていた…だがとある青年はこつも言っていた…「やらない後悔よりやる後悔のほうがいい」と…。

立花と優梨子はその場に荷物を放置し、いつの間にか体を動かして

いた。

彼らの正義の心が「その少女を助ける」、ただそれだけのために全神経を使い彼等はそれに身を任せていた。

「蛮勇」と言わればそれまで、「無謀」と言わればそれまで…だがもしこれで自分達が死ぬ結果にならうと…もしその行動で目の前にある「命」を助けられれば後悔はない…おそらく彼等はそう思つてている。

「手を伸ばさなかつたら絶対に後悔する」…とある無欲な青年の言葉を心に繰り返し、彼等は今にも漏れ出たガソリンの炎がタンクローリーの中にあるガソリンに引火しそうな中…その少女の元に辿りつき、少女を助けようと努力した。

だが何トンもある巨体、立花が素で「青春フルパワーーー!!」などと叫び力を込め巨体を動かそうとするが…彼等はれっきとした人間、その巨体を動かせるはずがない。

ダイナマイトの導火線を彷彿とさせながら火は迫る…そしてその炎が完全にガソリンタンクの元へとたどり着いたとき…立花と優梨子は同時に同じ行動をとつていた。

それは少女に追いがぶさるように身を呈した爆発から守ること…優梨子が最初に少女をかばい、その2人をかばうように立花がかばう…無情にも大量のガソリンに引火、そのタンクローリーは周囲に被害をもたらしながら大爆発を起こした…その後、少女はどうなったのか、立花と優梨子はどうなったのか…しばらくは、その「無謀ながらも勇気は持つていた」2人はその真実を知る由はなかった。

* * *

…白い、とはいっても絵具や色鉛筆、クレヨンやクーピーのようなチープな白ではない。

これは存在しない白だ…周りには文字どおりに何もなく、ただただ「無」が広がつてしているのみ。

…もしやと思いきや、その空間にはとある男女が2人…、無論、立花と優梨子だ。

2人は先ほどこの空間に自分達がいることを認識し、なぜこのような場所にいるのかを思案していた。

そもそも自分達はあのタンクローリーに足を挟めてしまつた少女を助けようと尽力し、結局自分達が身を呈しその少女をかばつた…だがそれ以降の記憶については全く覚えていないし…そもそもこの空間は、自分達にある「人間的本能」が訴え続けている。

ここは人がやすやすと入る場所ではない…ここは世に「存在しない」世界であると…。

なまじそういう方向の文化に関して詳しい2人は…まったく同タイミングで同じ言葉を発した。

「「まさかここって…死後の世界！？私聞いてない！？」

御丁寧にお約束のセリフまで言い、そこで笑いだす2人…だが死後の世界と認識して、ここまで楽天的な人間はそんなにいないであろう。

と、そんな2人に迫る人影、その人影はどこか幻想的な雰囲気を纏わせながら、ふと2人に現れた。

そして2人はその顔を見た瞬間…驚愕した。

「「紅渡（くん）！？」

「初めてまして、おそらくあなたがたが知るであろう紅渡です。」

「瀬戸康治さんってことはキバカディケイドの撮影！？…なわけないか。」

「随分とお一人は理解力がお有りで…。」

と、紅渡が言うが、この空間は余りにも異質だし…何より2人は自分が感じている「感覚」がないように感じられた…生きている人間

なら感じる体が「存在している」感覚、それがいくらどうこうしようと感じられない…そして記憶が知る限りおそらくあの後死んだであろう状況…走り出したときから覚悟はあったので、後悔はない…それよりも2人には気にかかることがあった。

「あの！最後に私がかばったあの子は！？」

「…あの少女なら、あなた方の尽力により足を大きく負傷しながら一命を取り留めました。いや、あなた方の行動の勇氣には感服いたしました。…しかし、同時に愚かでもあった。あなた2人の物語の終わりは、周りに悲しみを残すこととなるでしょう。」

渡の言うことはもつともである…おそらくあの子が足を挟め、その場で爆発に巻き込まれることは皮肉ながらも「運命」ということであつたのだろう。

だがその「運命」に介入者が2人入つたことにより、1人の終わりであつたはずのその事故は2人の終わりとして集結した…その分、降りかかってくる悲しみは大きい。

「…けど、いいと思うけどな。」

「…あなた方は本来死ぬべきではないといひで死んでしまった。それでも、ですか？」

「それでも。人は遅かれ早かれ死ぬんだし。それに…あの時、最低でも俺は思った…」ここで手を伸ばさなかつたら絶対に後悔する”つて。ずっと後悔しながら生きるなんて俺はいやだね。」

「それは私も同じ。…そりや、少しぐらいは未練はあるかもしれないけど、それでも、私の信念に従つただけだから、私はこんな終わり方でも後悔しなければ万々歳！」

「…信念…とは？」

「…仮面ライダーのように…なんて言わない！人間として、正義に生きる、絶対に！」

それは彼らがいつも合言葉としているモットー……お互いに人を守ることを信念としてきた。

そしてその思いを果たすことができた……最期の最期に、だ。
彼等にとつては一番清々しい、とも言えるかもしれない……現世に残してきた者達の悲しみは彼等もつらいところはある、だがそれを乗り越えて生きていく人間の強さも「仮面ライダー」という物語に生きていた人たちの群像劇で見てきたのだ、決して彼等は絶望しない。

「……やはり、あなたがたがこの世界の狭間で偶然残留したのも……因果、だつたのですね。……いきなりですいませんが、あなた方にはある世界に”転生”してもらいます。」

「転生!? それは本当か!」

「ええ。……僕は世界の物語を守りし存在。あなた方という”異分子”にはにはその世界に紛れ込んでしまった”悪の異分子”と戦つてもらいたいと思います。」

「……なるほど、”異分子”には”異分子”ってことね。」

「その通りです。……本来ならばその異分子を叩く仕事はほかの者が受け持つているのですが、現在彼はほかの大仕事で忙しいのです。……本来ならば一般人の助けを求めるのは心苦しいです、しかしこの次元の狭間に迷い込んだのも何かの縁、ぜひともあなた方にはその世界で新たな人生を歩み、その世界で戦つてほしい。お願ひします、もちろん、あなた方がよければ、の話ですが……。」

「……もしそれを断れば、俺達はどうなるんだ?」

「そのまま生命の輪廻の一部となり、魂をリセットされてその魂はまた新しい命となる。……いわば普通の人達と同じです。」

「……よし乗つた!」

「いいのですか!?」

まさかこんなに早く、それも即決してれるとは思つていなかつた渡、

自分からその「戦い」に殴りこむ…勇気がいるし、話の筋からおそらく「異世界」であると理解しているはず…右も左もわからない世界で生きることを容認する…これも勇気がいることだ。

「その話から、おそらくほかの候補者もいるとは思う。だが他人に押し付けるつてのも俺としては気が乗らないんだよ。…おそらくその話の筋だと、その異分子は危険なんだろう？」

「ええ。その異分子はその世界の正史を破壊し、さらにはその世界の理すべてを破壊します。」

「いいじゃん、その世界を守るヒーローってのもや。」

「そうよ！でも自分を過信しているわけではない。危険なのもわかる、けれど…その危険に立ち向かって、人を守ってきたヒーローの背中を私たちはずっと見てきたから、それに及ぶかは分からぬけど…でも、自分で出来ることなら！」

「…感謝します。ですがその世界では危険が待っているのは必然。さらにはあなた方が住んできた世界とはまったく仕組みが違いますから。」

「どんな世界なの？」

「…ゼロの使い魔、という小説は御存じでしょうか？」

「ゼロの使い魔って…あのゼロの使い魔！？」

「まさかどこかのネット小説みたいなことになるとは…不思議だなあ、まつたく。…ことは、なるほど、魔法の世界か。」

魔法…ゼロの使い魔の世界は各々が抱いているような魔法と大差はない。

火を放ち、傷を治し、突風を起こし、金属を作り出す…貴族と平民という2つの枠組みが存在し、地球で言う中世のヨーロッパの世界を再現したような世界…魔法、ともなると確かに危険は付きまとつ、あそここの世界には亜人やドラゴンといったモンスターも存在するし、今の平和な日本より何百倍も危険な世界だ。

「その世界であなた方はとある貴族の双子として転生してもらいます。」

「ふ、双子！？まあ、2人同時つてのは納得できるが……。」

今まで仲が良かつた親友が突然自分と地を分かち合つ双子となつたなんてノスタルジーでなんて唐突でなんと奇妙な話であろう。…が、ド天然である上で超ポジティブスキルを持つている優梨子からしてみれば…

「何それ面白そう！」

「…言ひと思つた。」

まあ…立花の中では優梨子は親友というより妹みたいな存在であつたし、決して恋感情とか持つたことはなかつたからまだ気まずいことはないであろう。

「…そして、あなた方にはその”救世の戦士”となるべくスキルをいくつか与えます。…ですが、それの他にも御所望したものが2人にあれば…1つだけなら。」

能力付加、というののもはやお約束であるし自分達はその異分子とやらを倒すために転生するのだから納得できる。

それにプラスとして特典も付けてくれるのだからありがたい…と2人は模索していると、ふと目が合い…そのアイコンタクトでお互いの意思を確認すると、2人は一糸間違えぬ息で同時に述べた。

「「Wドライバーとガイアメモリ！」」

「…なるほど、2人で1人、中睦まじいですね。…一応聞きますが、ロストドライバーは？」

「「あ、ほしいかも。」

「…それも付けておきますね。ですがその存在自体は秘匿をお願いします。」

「まあだらうな…。」

「それが原因でドーパントなんかだ出てきちゃつたら私も困るし。」

その曉には2人の探偵事務所が建つてしまつ事態になるであらう。

「…それでは、出発の時のことですね。」

そう渡が宣言すると、2人の背後に突如銀色のオーロラが現れる。これも理解している…仮面ライダーディケイドに出てくる異世界への扉だ。

「…それでは、自分から頼んでおいて、といつのもなんでしょうが…どうかご無事で。」

「…ああ。」

「もっちらん…。」

ただのその会話だけを交わし2人は…揺らめくオーロラの中へと勇気を持つて足を踏み入れた。

それを見届けた渡…と、小さなオーロラ越しからとある世界の様子を確認していると…渡のポケットから、彼の相棒である蝙蝠…キバットが姿を現した。

「渡、そんなにあいつらのことが不安か?」

「…あの方たちに必要な力は与えました。ですが…。」

「偶然見つけただけの一般人にすぎない。確かに、あのお願いを引き受けくれるのは超ラッキーだった。…お前も、実はあいつらたち

が良かつたんだろう?」

「…彼らが見せてくれた勇気、僕が言つたようにあれは無謀だったけれど…。」

「心を打たれた。…それでいいと思つぜ。渡はあいつらの正義の心に、その無謀ともいえる勇気に感動した、それに、あいつらだった全力で頑張つてくれると俺は思つ!」

「…そうだねキバット。最低でも自分の身を守れる力は託したから。…苦戦してるようだね、行くよキバット!」

「よつしゃーキバッて行くぜ!…ガブツ!」

彼もまた正義を愛する仮面ライダー：人の中にある「音楽」を守りたいと願い、守りとおした戦士：仮面ライダー・キバ。

そして…正義の系譜は…。

「おめでとうござります奥様!…男女の元気な双子ですよ!…」

とある貴族の家に響いた…元気な産声から、物語は始まる。舞台はハルケギニア…魔法の世界の物語の始まり。

ブレイ家の双子

ブレイ家…「ルクセン・アル・スペー・ド・ブレイ」の代から続く比較的新興貴族であり、領地も…広大である、とはいえない大きさ、いわばあまり力のない貴族の部類に入るが、農耕に至っては順調であり納税の面に関しても安定している、借金もなし…平穏である、というのがこのブレイ家であろうか。

貴族の中には領地の管理、村民の管理を厳かにするものも見受けられるが、このブレイ家…少なくとも、現在の代である「ヤン・ソン・ボルト・ノーカ・ド・ブレイ」子爵はそういった部類ではなく、むしろ領地民からの信頼はとても厚い、彼は類を見ない努力家でもあり、同時にちょっとしたカリスマも持つ一定の「実力者」である。そんなヤンの妻は「メリーハ・グラ・ド・ゲート・ブレイ」は献身的な妻…少しどジな面がありつつも周りにのほほんとした雰囲気を一瞬にして作り出すある意味カリスマ…そんな妻の存在がヤンの努力の力となる…と、同時にこの夫婦は砂糖にはちみつとチョコソースをかけたように甘い空気を作り出す、それは現在でも、そしてこれからずっと変わらないであろう。

…そんな仲睦まじい夫婦の間にもついに新しき命…次なる世代の鼓動がやってきた。
その命は…双子、その情報を聞いたときはさすがにブレイも迷ったが。

双子…もしどちらも男児であつたら、おそらく遠くない未来に後継ぎ騒ぎが起こる可能性大であるからだ、幸い自分の家系は王族ではないがそれでも貴族での後継ぎ問題は実際にシビア、特に双子というものは面倒になる可能性は特大。
新しき命には大変申し訳ないが、ここは男児一人、女児一人、というベストな配置でいてほしい…女児二人、というのも色々と面倒で

はあるが。

こつして念願かなつてやつてきた出産日…ヤンが当田メリー以上に
どたばたしながらも…無事、新しき命の産声は上がつたのだった。
嬉々迫るヤンはその愛おしき子供の顔を確認すると…1人は女児、
1人は男児…と、ヤンが願つたようなベストカップルでその顔を現
してくれた。

もちろん新しき命は大歓迎であるし、何より未来の不安の芽が1つ
減つたことにヤンは狂信者ではないにしろ始祖ブリミルに感謝した
日である。

4年後、正確には4年と半年が過ぎた頃合…今年の農
耕の調子を書類と見聞で確認するヤンの書斎室に不意とノックが響
く。

ドアの比較的下側から響くノック…となると心当たりは2人しかい
なかつた。

「入つていいぞ。」

「しつれいします、おとうさま。」

「おじやまいたします、おとうさま。」

ほかでもない愛おしき息子、その子独特の黒髪と金の瞳を持つ「ブ
レイブ・ノクト・トーデ・ブレイ」と愛おしき娘、メリーラーの
きれいな縁の髪と銀の瞳を持つ「リリウム・フリー・ド・ブレイ」
である。

…ヤンいわく「この子の将来が楽しみ」と言われている、ヤンいわ
く「才がある努力家」である自慢の娘息子。

どちらも1歳半からしゃべり始め、わずか半月でしゃべりをマスター
し、さらには3歳を過ぎた頃には魔法関係の書物を主に興味を持ち
始め、さらにはヤンの愛読書である領地管理学の本も漬入るように

読み始めた、驚くべきはその内容を幼少の子供とは思えないスピードでマスターしたこと。

赤ん坊の「ひからぢ」か異質な、いつ、落ち着き過ぎて「いる雰囲気を持つてこる」とは「各々の性格」と理解できた、だがどちらもこうして4歳とは思えないほどの学習能力と、何より態度だ。

わがままも言わず、だだをこねることもなく、時にはヤンの領地偵察に自分から同行すると…「なると、ヤンにはあと半年ほどである「杖契約」つまりメイジとしての「デビュー」が楽しみでしうがな、おかげで大量の魔法関係の本を買ってしまったほど…親バカである、だからこそこの「子供っぽい」子供たちにどうかせびしさすら感じてこるので…。

「ほんじつはつようちでこわつをびりひりさせていただくべくまーりました。」

「わたしはあたらしいほんをかりにまいました。」

「子供達よ…確かに少し前に”父として敬うよつこ”とはいつたが…」
…「…なんとこうか、他人行儀?な言葉使いもやめてくれないか?
?なんか…お父さん、拗ねわけやつそ?」

親バカである…本当は「ミニユニケーション能力も大事な貴族にとって重要な「順能力」に長けてこるためほめるべきところなのだが…だが、気持ちも少しだけわからなくもない。

「つようかいしました。それでは「こうかんじでよひしこでじょうか?」

「…それ、変わったのかい?」

…まあ、いついたリリウムの超マイペースな部分に癒される」ともあり、ヤンの心は荒れているわけではない。
むしろ、このマイペースでのほほんとしている雰囲気に妻の影を感じ

じまたおそらく本を読んでこむであらつメリーの「」を感じおしゃく感じ
じるわけだが…。

メリ一は現在病を患つており、絶賛療養中のみである…水のメイジの見立てでは、後一年弱は魔法と薬による治療によって感知するらしいが、それでも妻が大好きでしじうがないヤンは不安で不安でしょうがないのだ。

だが、それが理由で領地管理を厳かにした…とこうことになれば笑えない、今は元気がない妻のためにもヤンは一層と奮迅するのであつた。

「…しかし、そうか、もうそんな時間か。」

「おとうひまはまくやから、むつをしてこむよつすだそつで。エイ
かりききました。」

「…無理、か。まあ、徹夜はしていたが…。」

「それならほんじつはおやすみになつては。ほんじつはリコウムと
おべんきょうをしていきますので。」

「…ブレイブのこととも一理あるか…すまん、それでは今日の視
察は中止とする。ただし、この前みたいに熱中し過ぎるなよ。」

「…」

そういう言葉を残し愛おしき子供達は自分達の部屋に帰還した。

…だが最後のまるでメイドみたいな返事はヤンの心中にはどうして
もひつかかった…いや、父を尊敬していくことはわかるのだが…。

「…私はそんなに信用がないのだろうか? それとも…パパとの時間が少なかつたせいで見切られた! ? パパンショーチク! ?」

…過敏すぎるのも問題である。

* * *

ここはブレイ家の一角にある子供部屋…とはいっても通常の子供部屋よりはサイズが広い。

それもそうだ、ブレイ家の子供は双子、2人ということは自然と部屋も広くなる…とはいっても、どうみても2人部屋にしても広いのが現状…さすが生糸の親バカ夫婦である。

さらに目を見張るは部屋の一角にある本棚の特大な大きさとそれに見合う本の多さである…一応歳相応の子供の玩具はそんざいするがそれもかなり、いやほとんどない。

ここにいる2人の子供は…転生者、ブレイブは生前は佐久弥立花で、リリウムは及川優梨子、生前の精神年齢を加算すれば彼らの精神年齢は29歳…とはるかに上をいつている、なので5歳児が興味を持つ玩具に興味を持つ歳でもないし、さらにいうならここは異世界、それも彼らの時代で言う「中世のヨーロッパ」に近い世界…玩具もどうも古臭いものばかり。

消去法で彼らの暇つぶしといえば…前の世界ではなかつたような本、そして言えば魔法関係の書物や貴族における領地管理関係の書物などぐらいしかなかつたのである…おかげでたいていの呪文のスペルは頭に入つてしまつているが。

…今日は専属メイドであるエイも故郷であるタルブへと里帰りし、代役のメイドも厄介途中、現在この部屋およびこの部屋の周囲はこの2人だけである。

…だが念には念のため、リリウムはベッドの奥の奥、さらには簡単な仕掛けを施した小物箱から自分の手せいである簡易的な杖を取り出し「サイレント」…周囲に音を通じさせないコモンマジックを唱え完全防備となつた。

これは彼女の能力の一端「魔道具の作成スキル」から作ったもので、リリウムいわく「本を読んだら簡単にできた」だそうだ。

とはいっても簡易的なもの…契約を介さないわば「量産品」なのでせいぜいコモンマジックぐらいでしか精巧に発動できないが。

しかしながら魔法まで唱えてまわりに警戒するか…これからこの2人の話は「転生者」としての話となるからだ。

「…で、どうするの？物語に入れる？」

物語に入れる…つまりはこの「ゼロの使い魔」という世界でこれから起るであろう出来事に介入するか…ということ、「物語」^{ライトノベル}としてこの世界を把握している転生者だからこそできる荒業である。だがこの世界はおそらく「正史」…つまり物語の本筋は通らないと推測できる…なぜなら転生させた渡入つていたからだ…「物語を破壊する存在がいる」と…。

「…そうだな、この歳になればある程度行動の余地は増えるし…とにかく、今は力を蓄えよう。」

力…それは貴族、メイジであるが故の特権…「魔法」だ。

確かに大きな力…「Wドライバー＆ロストドライバー＆ガイアメモリ」は所有している（いつのまに化おもちゃ箱に混入していた）、だがあの力は一般的のメイジに使うには大きすぎる力であるし、おそらく「異端」扱いされるか「戦争の兵器」として利用されるか…悲しいが、どちらにせよマイナスなことしか思いつかない。

「…ところで、例のモノの構想はまとまってるか？」

「今のところは順調！でも材料は大丈夫なの？」

「そこはエイに無理を言ってがんばってもらってる。でもどうやって父さんに納得させるか迷ってる。」

「なら市場で買つことにして、そこで偶然見つけた変わり物…でいいんじゃない？」

「…ふむ、そうか、エイの知り合いに商人の伝手がいたはず。ありがとうリリウム、そうするよ！」

「えへへー。」

プレイブがリリウムの頭を撫でる…転生前の彼らを知っているものにとっては「お前ら付き合えよ」とよく言われた光景であるがやはりどう風向きが向いても彼らに「恋愛感情」はない…、なぜかない。それに双子で恋人は色々とアウトである。

* * *

…夕食前のプレイ家にはここ最近とある慣習がある。
それは…

「おかあさま、ほんじつのゆづじょくをもつてまいりました。」

「今日もありがとうね、リリウム。」

プレイブとリリウムが交代制で寝室で寝たきりの母…メリーに夕食を持つてくることである。

先述のとおり彼らの母であるメリーは現在患っている身であり、おそらく命に危険がないにしろ病持ち…本来ならここはメイドの仕事であろうが、これは彼女メリー自身の所望でもあった。

「せめて子供の顔は毎日見たい」という母親の切なる願いである…その願いは子供たちにも通じ、夕食前以外も…特に基本家中で過ごすリリウムは顔を見せに事ある」とにやつてくるのだ。

「でもリリウムとプレイブももつすぐ5歳ですか。時がたつのは早いですねえ。」

「えへへ。大きくなつたでしょ？」

優しくなれるメリーにリリウムは一気に精神年齢が減少するのだ。これは彼女の境遇の関係がある…生前、及川優梨子は母親を病氣で

失つており、小さいころの出来事であったため彼女は「母親のぬくもり」を知らずに生きてきた。

しかし自分はこれで2回目の人生…目の前には2人目の母であり実質初めて触れあった「実の母」でもある…そんな彼女の手のぬくもりが、リリウム…及川優梨子という魂を、まさに5歳児の如く戻してしまう…しかしそのぬくもりは優しい、自分の肌でそのぬくもりを感じて入ることに幸せを感じるのであった。

「5歳…となるとあなた方は杖契約…ついにマイジデビューなのですね。リリウムはどの属性になりたい?」

属性…土、水、風、火、そして幻の属性として虚無…虚無は例外として除き可能性がある4つの属性…主に魔法の属性は親の遺伝が多大に影響してくるので、大体は察することができるのだが。ちなみにヤンは風のトライアングル、メリーは土のトライアングルである。

「わたしはみずのぞくせいがいいです!」

「おや?どちらでもないのですね?」

「はい!しょもつでしらべましたが、みずのすくうえあになればたいていのびょうきのちりょうはかのうだそうなので、はやくみずのぞくせいをきわめておかあさまをらくにしてあげたいのです!だつておかあさま、ときどきすゞぐくるしそうなんだもの。」

「…リリウム。」

娘の愛はメリーの心に何倍にも増幅され、同時にその許容量を超えた感情が「涙」という形で具現化する、おそらく病の身といつのはかなり心の負担となるであろう、自分は迷惑をかけっぱなしで、子供たちとも遊ぶことができない…たまっていた感情でもあるのだろう。

「…では水を極めて、私だけでなく民達のことも助けられる立派な
メイジになりなさい。」

「はい、おかあさま！」

…ちなみに偶に部屋の前を通りかかつたとある某親バカパパがこの
話を聞きメリー以上に号泣した挙句夕食時にも涙を流し続けていた
…とか、余談でしかない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9124z/>

Round ZERO 【ゼロとWな転生者】《試験投稿中》

2011年12月28日21時49分発行